

## 沖永良部島方言動詞の形態音韻論

### Morphophonology of inflection in Okinoerabu-island dialect

杉村孝夫

Takao SUGIMURA

国語教育講座

キーワード：形態音韻論，動詞活用，沖永良部島 奄美方言

1. 奄美諸島南部の沖永良部島方言の動詞の活用は，内間（1984），平山（1986）では，基本語幹，連用語幹，融合語幹（派生語幹），音便語幹の4つの語幹に分けて記述されてきた。

2. 沖永良部島の北部，和泊町の手々<sup>ててあな</sup>知名方言<sup>1</sup>の動詞を4つの語幹に当てはめて各語幹の活用形を示すと，次のようになる。

なお，表記は音素表記とする。手々知名方言の音素は次の通り。

子音音素 / ? h'k Kg t T dc C z s r n N b p (P) m M / 大文字は喉頭音素

半母音音素 / j w /

母音音素 / i e a o u /

拍音素 / N Q /

	基本語幹		連用語幹	融合語幹	音便語幹	
	(甲)	(乙)				
1類	hak·a[a	hak-i· [wa	hac-ibu[sja	hacj-u[N	hac-ja[N	(書く)
	'u'ir-a[a	'u'iri- [wa	'u'ibu[sja	'u'ij-u[N	'u'it-a[N	(起きる)
2類	mj-a[a	mi-i· [wa	mi-ibu[sja	mj-u[N	mic-ja[N	(見る)
3類	tu[b·aa	tu[b·iwa	tu[b·ibusja	tu[b·iN	tu[d·aN	(飛ぶ)
4類	si[r·aa	si· [ri-wa	[si·ibusja	[sj·uN	[sj·aN	(する)

<sup>1</sup> 資料は，1984・1985年，『奄美方言基礎語彙の研究』（1986）のための調査において得た。主な話者は，T.T（70歳・女）氏，T.N（64歳・女）氏，I.T（61歳・男）氏。

5類	h-u[u (しよう)	kur-i- [wa (すれば)	Ci-ibu[sja (したい)	Cj-u[N (する)	kic-ja[N (した)	(来る)
----	----------------	---------------------	---------------------	----------------	------------------	------

3. 本稿では、活用とは、活用形を構成する語幹や接辞、語尾が結合して派生形へと具体化するために、それらが音声的或いは形態的条件によって音形を変えるものと捉えることにより、語幹は一つであるという解釈を提示する。

共通語で「五段活用」動詞の語幹が一定の条件で音便語幹を派生するものの、語幹は子音で終わる子音語幹一つであると解釈するのと同様である。例えば、kak-u (書く) → ka'·ita (書いた) (k→'/\_ita)

4. 和泊方言の動詞語幹を活用のパターンによって分類すると、規則変化(2類)と不規則変化に分類される。

#### 規則変化 I 類

- 1 a. hak- (書く)
- 1 b. ik- (行く)
2. huig- (漕ぐ)
3. hurus- (殺す)
4. tat- (立つ)
5. sin- (死ぬ)
6. 'i- (言う) mi- (見る) ki'- (切る) ki'- (着る) ni'- (煮る) (似る) ji'- (坐る)

#### 規則変化 II 類

7. tub- (飛ぶ)
8. jum- (読む) kam- (食う)
9. tur- (取る) har- (刈る) nibur- (眠る) habur- (被る) hir- (蹴る) 'ur- (居る) 'ar- (有る)  
hoor- (買う) waror- (笑う) 'aror- (洗う) m'uur- (思う)  
'u'ir- (起きる) 'utir- (落ちる) 'ukir- (受ける) 'agir- (上げる) 'abir- (呼ぶ) ku'ir- (結ぶ)

9の3行目、(起きる)(落ちる)など、共通語で一段活用のものがラ行五段活用と同じ類になっていることが特徴的である。20. で取り上げる。

不規則変化 sir- (する) kur- (来る)

#### 5. 規則変化 I 類

活用の形式的表記は次のように表す。

#AB+C+D#→abcd…形態素結合 #AB+C+D#は、派生形abcdとなる。

派生形にはアクセントを表記する。[ はピッチの上昇, ] はピッチの下降を表す。和泊方言のアクセント体系は名詞においては「多型アクセント」であるが、動詞のアクセントは語末拍(音節)が上昇するタイプと2拍目で上昇して語末まで高くなるタイプの二つである。

(書く)の活用形・形態変化

便宜的に4種の語幹に分けてみていく。

基本語幹

- 1 #hak+aa#→haka[a (書こう)
- 2 #hak+aN#→haka[N (書かない)
- ③ #hak+u+na#→ha[ku]na (書くな)
- 4 #hak+e+wa#→haki[wa (R1) (書けば)
- 5 #hak+e#→ha[ki (R1) (書け)

4, 5は次の規則により派生する。

(R1) e→i/\_\_\_wa, # (高母音化。仮定のewa, 命令のeはiwa, iに変わる。)

4について(R1)が適用される過程を示せば次のようになる<sup>2</sup>。

4の派生過程

#hak+e+wa# (書けば)

(R1) 高母音化 #hak+i+wa#

派生形 haki[wa

5の派生過程

#hak+e# (書け)

(R1) 高母音化 #hak+i#

派生形 ha[ki

連用語幹

- 6 #hak+ibusja#→hacibu[sja (R2) (書きたい)
- 7 #hak+ijabuN#→hacja[buN (R3) (書きます)

6, 7は次の規則で派生する。

(R2) k→c/\_\_\_i…6, 7の場合, kiがciになる。

(軟口蓋破裂音は母音iの前で口蓋化して硬口蓋破擦音になる。)

(R3) i→ϕ/\_\_\_j (iはjの前で消去する)…7の場合, ijaがjaになる。

<sup>2</sup> hak+i+wa, hak+iのようにiとすると, R2の母音iの前でkが口蓋化してcとなる規則の適用を受けてしまう。それを避けるためにはeとしておいて高母音化規則を立てるのがよい。高母音化は奄美・琉球方言に一般的な規則である。

6の派生過程

#hak+ibusja# (書きたい)  
 (R2) 語幹末子音口蓋化 #hac+ibusja#  
 派生形 hacibu[sja]

7の派生過程

#hak+ijabuN# (書きます)  
 (R2) 語幹末子音口蓋化 #hac+ijabuN#  
 (R3) 母音iの消去 #hacjabuN#  
 派生形 hacja[buN]

融合語幹

8 #hak+i+'uN#→hacju[N] (書く・終止形1) Cjuunu hacjuN (人が書く)  
 9 #hak+i+'umu#→hacju[mu] (書く・終止形2)<sup>3</sup>  
 10 #hak+i+'unu#→hacju[nu] (書く・連体形)  
 11 #hak+i+'ura#→hacju[ra] (書く・gaの結び) ziiga hacjura (字を書くのかしら)  
 12 #hak+i+'uru#→hacju[ru] (書く・duの結び) ziidu hacjuru (字を書くのだ)  
 13 #hak+i+'untane#→hacjunta[ne] (書くまで)  
 ⑭ #hak+i+'uee#→hacju[ele] (書くか)

8～14は次の規則で派生する。

(R4) i→j/ \_\_+'u, 'a (母音iに'uまたは'aが続くと母音iが半母音jになる。  
 iの後に#(語境界)があれば、この規則は適用されない。)

8の派生過程を代表としてあげる。

#hak+i+'uN# (書く)  
 (R2) 語幹末子音口蓋化 #hac+i+'uN#  
 (R4) 母音の半母音化 #hacj+'uN#…ここでは、iの後は'uであるが、15で'aが続く。  
 派生形 hacju[N]

<sup>3</sup> 終止形1と終止形2は次のような場合に用いられる(平山1986)。

wa Cjuisi hacjuN (私はひとりで書く) mani hacjuNdoo (ここに書くぞ)

'anu Cjuuwa hutusi 'ukijumudi 'icjaN (あの人は今年受けたと言った)

jamadakuNmu 'ukijumunaNkaja (山田君も受けるのではないかな)

終止形1は話し手が直接かわることがら、終止形2は直接かわらないことがらを表現する時に用いられる。

音便語幹

15 #hak+ti+'aN#→#ha+ti+'aN#→hacja[N] (書いた)

⑩ #hak+ti#mu#→#ha+ti#mu#→ha[ci]mu (書いても)

⑪ #hak+ti#aN#→#ha+ti#aN#→#haci#aN#→ha[ci]'aN (書いてある)

但し、(R4) は適応されない。派生形の直前まで語境界が残ることで指定できる。

⑫ #hak+ti#uk+aa#→#ha+ti#uk+aa#→#haci+'uk+aa#→ha[ci]'ukaa~ha[cju]ka (書いておこう) (R8)

⑬ #hak+ti#uN#→ha[ci]'uN~ha[cju]N (書いている)

15~19 では、接辞 ti の前では、語幹末尾の子音 k を消去し (R6), 接辞の t が口蓋化する (R7)。

(R5) t→d/#·g, n, b, m (有声子音) +\_\_ (語幹末の有声子音の後で接辞が有声化する=ti の t が有声化して d になる。)

ただし、(R5) は後出の (漕ぐ, 死ぬ) などに適用される。

(R6) #·k, s, t, r, ', g, n, b, m→φ/\_\_\_+ti, di (語幹末子音 k, s, t, r, ', g, n, b, m は接辞 ti, di の前で消去する。)

(R7) t, d→c, z/\_\_\_i (語幹末子音が b, m, r 以外の場合, i の前で口蓋化する。)

18 では更に母音が短くなる。

(R8) VV→V/\_\_\_# (語末の長母音が短くなる。任意)

15 の派生過程<sup>4</sup>

	#hak+ti+'aN# (書いた)
(R6) 語幹末子音消去	#ha+ti+'aN#
(R7) 口蓋化	#ha+ci+'aN#
(R4) 半母音化	#ha+cjaN#
派生形	hacja[N]

16 の派生過程

	#hak+ti#mu# (書いても)
(R6) 語幹末子音消去	#ha+ti#mu#
(R7) 口蓋化	#ha+ci#mu#

<sup>4</sup> 15 #hak+i+taru#→hak+cjaru(ita→cja)→ha+cjaru(R6)→hacjaN(R10)

のように考えることもできる。そうすると、16 以下の語境界の有無の差との不自然性が解消される。但し、ita→cja の「逆行同化」が一般的か、語幹末の子音が消去する根拠は何か、語末の ru が撥音化する (R10) 根拠は何か、などが問題として残る。

また、#hak+i+'aN#→haci+'aN→hacja[N] のようにも考えられる。やはり、16 以下との違い、特に 17 ha[ci]'aN (書いてある) との違いも説明できる。ただし、15 を音便語幹から融合語幹に分類変えをしなければならぬ。

派生形                    ha[ci]mu

17の派生過程

#hak+ti#aN# (書いてある)

(R6) 語幹末子音消去    #ha+ti#aN#

(R7) 口蓋化            #ha+ci#aN#

派生形                    ha[ci]'aN

18の派生過程

#hak+ti#uk+aa# (書いておこう)

(R6) 語幹末子音消去    #ha+ti#uk+aa#

(R7) 口蓋化            #ha+ci#uk+aa#

(R4) 半母音化          #ha+cjuk+aa# (語境界が消えて起きる)

(R8) 母音短呼          #ha+cjuk+a (a) #

派生形                    ha[cju]ka (a)

19の派生過程

#hak+ti#uN# (書いている)

(R6) 語幹末子音消去    #ha+ti#uN#

(R7) 口蓋化            #ha+ci#uN#

(R4) 半母音化          #ha+cjuN# (語境界が消えて起きる)

派生形                    ha[cju]N

6. 以上から (1) ~ (8) の規則により、一つの語幹から各活用形が作り出せる。

16~19は語境界の存在により (R4) 半母音化が起きない。一方⑱, ⑲はそれにもかかわらず半母音化が起きる。18, 19においては下に示すように、半母音化が起きる場合と起きない場合の両形が現れる<sup>5</sup>。(R4)は任意である。しかし、半母音化のまえに、口蓋化が起きるか否かで差がある。こうなるのは一定の語群のせいである。規則変化動詞は語幹末の子音により二つの語群に分かれる。

口蓋化する語幹

hak- (書) ,ik- (行) ,hu'ig- (漕) ,hurus- (殺) ,tat- (立) ,sin- (死) ;

i'- (言) ,mi'- (見) ,ki'- (切) ,ki'- (着) ,ni'- (煮) ,ji'- (座)

口蓋化しない語幹 tub- (飛) ,jum- (読) ,kam- (食) ,tur- (取) ,...u'ir- (起) ...ku'ir- (結)

18, 19の派生形で、両者の違いを見てみよう。

<sup>5</sup> 上野 (2000) でも同様。ha「cju」N~ha「ci'u」N (書いている) の2形がある。多くの動詞に表れる。

口蓋化する語幹の18 (～しておこう)<sup>6</sup>

ha[ci]'ukaa~ha[cju]ka (a) (書), 'i[zju]ka (行), hu[zju]ka (漕), hu[rucju]ka (殺), ta[cju]ka (立), 'i[cju]ka (言), mi[ci]'ukaa~mi[cju]ka (見), ki[cju]ka (切, 着), ni[cju]ka (煮), ji[cju]ka (座)

口蓋化しない語幹の18 (～しておこう)

ju[du]ka (読), ka[du]ka (食), tu[tu]ka (取), ha[tu]ka (刈), ni[butuka (眠), ha[butuka (被), [hootuka (買), 'a[roti]'ukaa~'a[rotuka (洗), 'uitu]ka (起), 'uki[ti]'ukaa~'ukitu]ka (受), 'a[giti]'ukaa~'a[gituka (上), [ku'ici]'ukaa~[kuicjuka<sic.> (結),

なお, [sii]'ukaa~[sjuu]ka (為), ki[ci]'ukaa~ki[cju]ka (来)

口蓋化する語幹の19 (～している)

ha[ci]'uN~ha[cju]N (書), 'i[zi]'uN~'i[zju]N (行), hu'i[zi]'uN~hu'i[zju]N (漕), hu[ruci]'uN~hu[rucju]N (殺), ta[ci]'uN~ta[cju]N (立), si[zi]'uN~si[zju]N (死), 'i[ci]'uN~'i[cju]N (言), mi[ci]'uN~mi[cju]N (見), ki[ci]'uN~ki[cju]N (切, 着), ni[ci]'uN~ni[cju]N (煮)

口蓋化しない語幹の19 (～している)

tu[di]'uN~tu[du]N (飛), ju[di]'uN~ju[du]N (読), ka[di]'uN~ka[du]N (食), tu[ti]'uN~tu[tu]N (取), ha[ti]'uN~ha[tu]N (刈), ni[buti]'uN~ni[buti'u]N~ni[butu]N (眠), habu[ti]'uN~habu[tu]N (被), hi[ti]'uN~hi[tu]N (蹴), [hooti]'uN~[hootu]N (買), wa[roti]'uN~wa[rotu]N (笑), 'a[roti]'uN~'a[rotu]N (洗), Muu[ti]'uN~Muu[ti'u]N~Muu[tu]N (思), 'u'i[ti]'uN~'ui[tu]N (起), 'uti[ti]'uN~'uti[tu]N (落), 'uki[ti]'uN~'uki[tu]N (受), 'a[giti]'uN~'a[gitu]N (上), 'abi[ti]'uN~'abi[tu]N (呼), [ku'iti]'uN~[ku'itu]N (結)

15 過去形で両者の違いを見てみよう。過去形には非融合形 (=半母音化しない形) はない。

口蓋化する hacjaN, 'izjaN, hu'izjaN, hurucjaN, tacjaN, sizjaN, 'icjaN, micjaN··

口蓋化しない tudaN, judaN, kadaN, tutaN, ···u'itaN, ···kubitaN

それぞれをI類とII類とする。(書く)はI類の動詞である。

7. 以上の活用形については、アクセントについても、次のように説明できる。まず、語幹#hak-は、後末アクセントをもつ<sup>7</sup>。

数字に○を付けた3, 14, 16, 17, 18, 19は、次語末アクセントになる。なぜこれらが次語末アクセントであるのか、その条件について考えるために次のペアーを比較してみよう。

<sup>6</sup> 18において、融合形と非融合形の両形が表れるが、書く、見る、洗うなど代表的な動詞についてのみ確認した。

<sup>7</sup> 語末アクセントは、単語の末尾の拍(音節)だけが高くなるアクセント。次語末アクセントは、単語の末尾から2番目の拍(音節)だけが高くなるアクセント。

- 8 #hak+i'uN#→hacju[N] (書く)  
 ⑱ #hak+ti#uN#→ha[cju]N (書いている)

- 15 #hak+ti+'aN#→hacja[N] (書いた)  
 ⑲ #hak+ti#aN#→ha[ci]'aN (書いてある)

⑱ ha[cju]N (書いている) は、アクセント以外は8 hacju[N] (書く) と同じ形であり、アクセントでは次語末アクセント (書いている) と語末アクセント (書く) で区別される。また、⑲ ha[ci]'aN (書いてある) は、15 hacja[N] (書いた) とアクセントでは次語末アクセントと語末アクセントで区別される。それぞれのペアは、形態素結合が異なる。8と⑱の差は(書く)では分かりにくい、(殺す)では、次のように派生形も異なり、その差が分かりやすい。

- 8 #hurus+i'uN#→hu[rusju]N (殺す)  
 19 #hurus+ti#uN#→hu[rucju]N (殺している)  
 15と17でもやはり、派生形のアクセントが異なる。  
 15 #hurus+ti+'aN#→hu[rucja]N (殺した)  
 17 #hurus+ti#aN#→hu[ruci]'aN (殺してある)

アクセントの違いは1語であるか、2語であるか( # が語境界を表す)の差に由来する。

16, 18も、17, 19に準ずる。その他、3 ha[ku]na (書くな)、14 hacju[e]e (書くか) は語末の-na, -u'eeの独立性が強く、アクセントの位置を前にずらしていると考えられる。

## 8. (行く)の活用形・形態変化

'icj-uN は、語幹末子音が(書く)と同じであることから同じ派生形が予想されるが、共通語で「音便形」が異なる(「書いた」に対する「行った」)のと同様、「音便語幹」が異なる。

まず、1~14までは(書く)と同様である。

- 6 #ik+ibusja#→'i[cibusja] (行きたい)  
 7 #ik+'jabuN#→'i[cjabu]N (行きます)  
 8~14も'i[cju]N, 'i[cjumu]…である。

次の活用形が異なる。

- 15 #ig+ti+'aN#→'i[zja]N (行った)である。\*i[cja]Nとはならない。  
 16 #ig+ti#mu#→#i+di#mu#→'i[zimu] (行っても)  
 ⑲ #ig+ti#aN#→'i[zi]'aN (行ってある)  
 ⑳ #ig+ti#uk+aa#→'i[zju]ka (行っておこう)  
 ㉑ #ig+ti#uN#→'i[zi]'uN~'i[zju]N (行っている)

15~19では、1~14とは異なり、#ig-という語幹が語彙レベルで交代すると考えれば(漕ぐ)類と同じ(R5)(R6)(R7)(前掲)により説明できる。

そうでなければ、語幹#ik+に限って適用される、

(R7') c → z / ic+i+ (mu, 'aN, 'uN, 'uk+) (有声化)

を立てることになり不自然である。

9. (行く) の語幹#ik-/ig-は、ピッチの下降のない、2拍目から語末まで高が続くアクセントである。

17, 18, 19 は次語末アクセントとなる。(書く) と同様な対比が出来る。

8 'i[cjuN (行く)

⑩ 'i[zjuN (行っている)

15 'i[zjaN (行った)

⑪ 'i[zi]'aN (行つてある)

但し、3 'i[kuna (行くな)、16 'i[zimu (行つても) は次語末アクセントにならない。

## 10. (漕ぐ) の活用形・形態変化

基本語幹

1 #hu'ig+aa#→hu'iga[a (漕ごう)

2 #hu'ig+aN#→hu'iga[N (漕がない)

3 #hu'ig+u+na#→hu'ig u[na (漕ぐな) ? hu'ig [u]na

4 #hu'ig+e+wa#→hu'ig i[wa (R1) (漕げば)

5 #hu'ig+e#→hu'i[gi (R1) (漕げ)

連用語幹 (R2)

6 #hu'ig+ibusja#→huizibu[sja (漕ぎたい)

7 #hu'ig+i'jabuN#→huizja[buN (漕ぎます)

語幹末の子音 k, g は無声・有声に関わらず口蓋化するの、(R2) は (R2') のように書き換えられる。

(R2') k, g → c, z / \_i

(軟口蓋破裂音は母音 i の前で口蓋化して硬口蓋破擦音になる。)

融合語幹 (R2')

8 #hu'ig+i+'uN#→hu'izju[N (漕ぐ)

9 #hu'ig+i+'umu#→hu'izju[mu (漕ぐ・終止形2)

10 #hu'ig+i+'unu#→hu'izju[nu (漕ぐ・連体形)

11 #hu'ig+i+'ura#→hu'izju[ra (漕ぐ・ga の結び)

12 #hu'ig+i+'uru#→hu'izju[ru (漕ぐ・du の結び)

13 #hu'ig+i+'untane#→hu'izjunta[ne (漕ぐまで)

14 #hu'ig+i+'u'ee#→hu'izju'l'e (漕ぐか)

音便語幹… (R2')

15 #hu'ig+ti+'aN#→#hu'ig+di+'aN#→#hu'i+di+'an#→hu'izja[N (漕いだ)

16 #hu'ig+ti#mu#→#hu'ig+di+mu#→hu'izi[mu (漕いでも) ?hui[zi]mu

⑰ #hu'ig+ti#aN#→#hu'ig+di+'aN#→hu[zi]'aN (漕いである)

⑱ #hu'ig+ti#uk+aa#→#hu'i+zi#uk+aa#→hu[zju]ka (漕いでおこう)

⑲ #hu'ig+ti#uN#→#hu'i+zi#uN#→hu'i[zi]'uN~hu'i[zju]N (漕いでいる)

以上は (R5) (R6) (R7) 及び次の (R9) により派生する。

(R9) 'i→φ/u\_\_ ('iがuの後で消去して、母音連続を避ける。)

17では、(R4)は起きず、(R9)が起きる。

18では、(R4)が起きた後、更に(R9)が起きる。

19では、(R4)が起きるが、(R9)は起きない。16でも(R9)は起きない。

このような、変化が起きたり起きなかったりする条件は何であろうか。

18の派生過程

#hu'ig+ti#uk+aa# (漕いでおこう)

(R5) 接辞tiの有声化

#hu'ig+di#uk+aa#

(R6) 語幹尾子音gの脱落

#hu'i+di#uk+aa#

(R7) 口蓋化

#hu'i+zi#uk+aa#

(R4) 半母音化

#hu'izjuk+aa# (語境界が消えて起きる)

(R9) 母音脱落

#huzjuk+aa

派生形

hu[zju]kaa

11. 上記10.の現象を考えてみよう。

(漕ぐ)では、(R9)が適用されないのは16, 19である。17, 18と16, 19の違いは活用形全体の長さが関係しているであろう。17\*hu'izi'aN, 18\*hu'izi'ukaaは5~6拍の長さがある。一方16, 19のそれは4拍である。(R9)は「長い」形態素結合で起こると考えられる。

12. 規則変化の(書く)(行く)(漕ぐ)の語幹末子音の変化は、口蓋化であることが分かった。一方、次の

13. -15.の、活用形15-19における語幹末の子音は、接辞+tiが関与するための音変化である。<いずれも歯茎音であるが、調音様式(破擦, 摩擦, 破裂)と声(有声性)の異なるc, z, t, dの4つの音になる。

>

13. #hurus- (殺す) #utus- (落とす) では, 次の場合子音が変わる。

音便語幹

15 #hurus+ti+'aN#→#huru+ti+'aN#→#huru+ci+'aN#→hu[rucjaN (殺した)

16 #hurus+ti#mu#→hu[rucimu (殺しても)

17 #hurus+ti#aN#→hu[ruci] 'aN (殺してある)

18 #hurus+ti#uk+aa#→hu[rucjuka (殺しておこう)

19 #hurus+ti#uN#→hu[rucju]N (殺している)

これも (R6) (R7) で派生する。

14. #tat- (立つ) #mat- (待つ)

6 #tat+ibusja#→tacibu[sja

7 #tat+ijabuN#→tacja[buN

8 #tat+i+'uN#→tacju[N

...

14 #tat+i+'u'ee#→tacju['e]e

15 #tat+ti+'aN#→tacja[N

16 #tat+ti#mu#→ta[ci]mu

17\* (語形なし)

18 #tat+ti#uk+aa#→ta[cju]ka

19 #tat+ti#uN#→ta[ci] 'uN~ta[cju]N

6, 7, 8~14 については, 語幹末子音の口蓋化で派生する<sup>8</sup>。

(R7) t, d→c, z/\_\_\_i (語幹末子音が b, m, r 以外の場合, i の前で口蓋化する。) (再掲)

15-19 の派生形は同じ c が現れるが, これらでは接辞-ti が続くため一旦 (R6) が適用されて語幹末子音が消去し ta+ti+mu となり, (R7) が適用されて ta[ci]mu が派生される。

6 の派生過程

#tat+ibusja# (立ちたい)

(R7) 口蓋化 #tac+ibusja#

派生形 tacibu[sja

<sup>8</sup> 口蓋化は i の前でのみ起こるのであって, 3 ta[tu]na のように, 母音 u の前では口蓋化しない。また, 4 tati[wa 5 ta[ti は, #tat+e+wa#, #tat+e# の結合であるから口蓋化しない。

16の派生過程

	#tat+ti#mu# (立っても)
(R6) 語幹末子音消去	#ta+ti#mu#
(R7) 口蓋化	#ta+ci+mu#
派生形	ta[ci]mu

15. #sin- (死ぬ) の 15-19 も前掲の (R5) - (R7) で派生する。

15 #sin+ti+'aN#→#sin+di+'aN# (R4) →#si+di+'aN# (R5) →si[zjaN (R7)

16 #sin+ti#mu#→si[zimu

17\* (語形なし)

18\* (語形なし)

19 #sin+ti#uN#→si[di]'uN~si[zju]N

16. #i'- (言う), mi'- (見る), ki'- (切る), ..., ji'- (座る)

(言う)

基本語幹		(見る)	(切る)
1 #i'+aa#→[ʔjaa	(R4) i'u, a→ju, ja	mja[la	kja[la
2 #i'+aN#→[ʔjaN	(R4)	mja[N	kja[N
3 #i'+u+na#→[iNna		[miN]na	[kiN]na

3の派生形が出来るためには (R4) が適用されるよりも先に (R10) (r) u→N/\_\_\_n (ru, u が鼻音の前で撥音<鼻音>化する。) が適用されなければならない。

4 #i'+e+wa#→[i'wa	(R1)	mii[wa	kii[wa
5 #i'+e#→[i'	(R1)	[mi	[ki
6 #i'+ibusja#→[i'ibusja		miibu[sja	kiibu[sja
7 #i'+ijabuN#→i'jabuN→[ʔjaabuN		mjaa[buN	kjaa[buN

7では (R4) で i'ija が i'ja になって、更にもう一度 (R4) により派生形が生じる。

8 #i'+i+'uN#→[ʔjuN	mju[N	kju[N
(R4) i+i'u→i+'ju, (R3') #i+ju→ʔju		
9 #i'+i+'umu#→[ʔjuumu	mjuu[mu	kjuu[mu

9-14 では、短くなりすぎた#ʔjumu#などの1番目の母音を延ばしている。

10 #i+i+'unu#→[?juunu	mjuu[nu	kjuu[nu
11 #i+i+'ura#→[?juura	...	...
12 #i+i+'uru#→[?juuru		
13 #i+i+'untane#→[?juntane		
14 #i+i+'u+'ee#→[?juu'e]e	mjuu[e]e	kjuu[e]e
15 以下は, (R6) (R7) で派生する。		
15 #i'+ti+'aN#→i'+ti+'aN→i[cjaN	micja[N	kieja[N
16 #i'+ti#mu#→i[cimu (sic)	mi[ci]mu	ki[ci]mu
17 #i'+ti#aN#→i[cii] 'aN	mi[ci] 'aN	ki[ci] 'aN
18 #i'+ti#uk+aa#→i[cju]ka	mi[cju]ka	ki[cju]ka
19 #i'+ti#uN#→i[cju]N	mi[cju]N	ki[cju]N

規則変化Ⅱ類

17. #tub- (飛ぶ), jum- (読む), kam- (食べる)

Ⅱ類では 15-19 は, (R4) とは異なり, 下記 (R11) により派生する。

15 #tub+ti+'aN#→#tub+di+'aN#→#tu+di+'aN#→#tudi+'aN#→tu[daN (飛んだ)  
juda[N kada[N も同様にして派生する。

	(読む)	(食う)
16 #tub+timu#→tu[dimu (飛んでも)	ju[di]mu	ka[di]mu
17 #tub+ti#aN#→tu[di] 'aN (飛んである)	ju[di] 'aN	ka[di] 'aN
(18 tu[du]ka)	ju[du]ka	ka[du]ka
19 #tub+ti#uN#→tu[di] 'uN~tu[du]N (飛んでいる)	judu[N	kadu[N

(R11) i→φ / \_\_'a, 'u (語幹末の子音が b, m, r の場合, 'a, 'u の前で母音 i が消去する。) これは, (R4) と反対に i 母音に a 母音が続いても半母音化が起きず, 消去する。

また, (R11) が起きれば母音連続がなくなるので (R7) も適用されない。よって 15, 18, 19 で直音が現れる。

15 の派生過程

	#tub+ti+'aN# (飛んだ)
(R5) 接辞の有声化	#tub+di+'aN#
(R11) 母音消去	#tub+d+'aN#

(R6) 語幹末子音消去 #tu+d+'aN#<sup>9</sup>  
 派生形 tu[daN]

17の派生過程

#tub+ti#aN# (飛んである)  
 (R5) 接辞の有声化 #tub+di#aN#  
 (R6) 語幹末子音消去 #tu+di#aN#  
 派生形 tu[di]'aN

語境界があるため (R4) i→j/\_\_\_u, a も, また, 語幹末子音はII類であるため (R7) t, d→c, z/\_\_\_i も起こらない。

18. #tur- (取る), har- (刈る), nibur- (眠る), habur- (被る), hir- (蹴る), 'ur- (居る), 'ar- (有る) も, 17. と同様。

	(居る)	(有る)
15 #tur+ti+'aN#→#tu+ti+'aN#→tuta[N (取った)	'u[taN	'ata[N
16 #tur+ti#mu#→#tu+ti#mu#→tu[ti]mu (取っても)	'u[timu	'a[ti]mu
17 #tur+ti#aN#→#tu+ti#aN#→tu[ti]'aN (取ってある)	'u[ti]'aN	*
18 #tur+ti#uk+aa#→tu[tu]ka (取っておこう)	*	*
19 #tur+ti#uN#→tu[ti]'uN~tu[tu]N (取っている)	*	*

15の派生過程

#tur+ti+'aN# (取った)  
 (R11) 母音消去 #tur+t+'aN#  
 (R6) 語幹末子音消去 #tu+t+'aN#  
 派生形 tuta[N]

15, 18, 19では, (R11) 母音消去により直音化する。

16の派生過程

#tur+ti#mu# (取っても)  
 (R6) 語幹末子音消去 #tu+ti#mu#  
 派生形 tu[ti]mu

17の派生過程

---

<sup>9</sup> d+'のような子音連続では'は消去する (C+'→C)。

#tur+ti#aN# (取ってある)

(R6) 語幹末子音消去 #tu+ti#aN

派生形 tu[ti]’aN

語境界があるため (R4) i→j/\_\_\_u, a も, また語幹末子音はⅡ類であるため (R7) t, d→c, z/\_\_\_i も起こらない。

19. #tur- (取る) について, その他の派生形における音変化を見ておこう。いくつかの子音や母音の脱落, 撥音化, 半母音化が起こる。

1 #tur+aa#→tura[a

2 #tur+aN#→tura[N

3 #tur+u+na#→tuN[na

(R10) (r) u→N/\_\_\_n (ru, u が鼻音の前で撥音<鼻音>化する) 既出

4 #tur+e+wa#→turi[wa (R1)

5 #tur+e#→tur[i (R1)

6 #tur+ibusja#→#tur+ibusja#→tu’ibu[sja (R12)

7 #tur+ijabuN#→#tu+’ijabuN# (R12) →tuja[buN (R6)

(R12) r→φ/\_\_\_i (i の前で r が脱落する。)

8 #tur+i+’uN#→turjuN (R4) →tjuj[N (R12) (取る)

9 #tur+i+’umu#→#tu+i+’umu#→#tur+jumu#→tjuj[mu (取る・終止形2)

10 #tur+i+’unu#→tjuj[nu (連体形)

11 #tur+i+’ur+aa#→tjuj[ra (ga の結び)

12 #tur+i+’uru#→tjuj[ru (du の結び)

13 #tur+i+’untane#→tjujunta[ne (取るまで)

14 #tur+i+’u’ee#→#tur+ju’ee#→tjuj[je]e (取るか)

14 での変化は, 次の規則による

(R13) V→jV/jV\_\_\_ (口蓋化母音の後で母音が口蓋化する。)

20. #u’ir- (起きる) の派生過程は#tur- (取る) と同じである。比較しながら見ていこう。

基本語幹

(取る)

1 #u’ir+aa#→’u’ira[a (起きよう)

#tur+aa#→tur-a[a

- |                                      |                    |
|--------------------------------------|--------------------|
| 2 #u'ir+aN#→u'ira[N (起きない)           | #tur+aN#→tura[N    |
| 3 #u'ir+u+na#→u'in[na (起きるな)         | #tur+u+na#→tuN[na  |
| 4 #u'ir+ewa#→u'iri[wa~uirja[a (起きれば) | #tur+e+wa#→turi[wa |
| 5 #u'ir+e#→u'iri (起きろ)               | #tur+e#→tu[ri      |

6, 7には(取る)の場合と同じ

(R12) r→φ/\_\_\_i (iの前でrが脱落する。)

が適用される。

連用語幹

- |                                 |                         |
|---------------------------------|-------------------------|
| 6 #u'ir+ibusja→u'ibu[sja (起きたい) | #tur+ibusja#→tu'ibu[sja |
| 7 #u'ir+i'jabuN→u'ja[buN (起きます) | #tur+i'jabuN#→tuja[buN  |

融合語幹

- |   |  |
|---|--|
| 8 #u'ir+i+'uN#→#u'i+i+'uN#→u'iju[N (起きる)    | #tur+i+'uN#→#turjuN# (R4) →tuju[N (取る)     |
| 9 #u'ir+i+'umu#→#u'i+i+'umu#→u'iju[mu (起きる) |  |
| ...   |  |
| 14 #u'ir+i+'u+'ee#→u'iju[je]e (起きるか)        | #tur+i+'u+'ee##→#tu+ju'ee#→tuju[je]e (取るか) |

音便語幹

- |   |   |
|---|---|
| 15 #u'ir+ti#aN#→#u'i+ti+'aN#→u'ita[N (起きた)  | #tur+ti+'aN#→#tu+ti+'aN#→tuta[N (取った) 以下, (取る) との比較略。 |
| 16 #u'ir+ti#mu#→u'iti[mu (起きても)             |   |
| 17 #u'ir+ti#aN#→u'i[ti]'aN (起きてある)          |   |
| 18 #u'ir+ti#uk+aa#→u'itu[ka (起きておこう)        |   |
| 19 #u'ir+ti#uN#→u'i[ti]'uN~u'i[tu]N (起きている) |   |

15の派生過程

#u'ir+ti#aN# (起きてある)

(R6) 語幹末子音消去 #u'i+ti+'aN#

(R11) i+'a, 'u→a, 'u #u'i+taN# ('u'icjaNにはならない)

派生形 u'ita[N

21. a規則変化の語幹末子音の音変化を整理すると次のようになる。

(R2') k, g→c, z/\_\_\_i

(軟口蓋破裂音は母音 i の前で口蓋化して硬口蓋破裂音になる)

(R5)  $t \rightarrow d / \# \cdot b, n, b, m$  (有声子音) +  $\_$  (語幹末の有声子音の後で接辞が有声化する = ti の t が有声化して d になる)

(R6)  $\# \cdot k, s, t, r, ', g, n, b, m \rightarrow \phi / \_ + ti, di$  (語幹末子音 k, s, t, r, ', g, n, b, m は接辞 ti, di の前で消去)

(R7)  $t, d \rightarrow c, z / \_ i$  (語幹末子音が b, m, r 以外の場合, 母音 i の前で口蓋化する)  
口蓋化を阻む

(R11)  $i \rightarrow \phi / \_ 'u, 'a$  (語幹末子音が b, m, r の場合, 母音消去)<sup>10</sup>

・・r で終わる語幹には次の変化も起きる。

(R10) (r)  $u \rightarrow N / \_ n$  (ru, u が鼻音の前で撥音<鼻音>化する)

(R12)  $r \rightarrow \phi / \_ i$  (i の前で r が脱落する)

## 22. b 様々な活用形の派生は

### ①子音の変化

(R2') (R7) に見られる口蓋化と (R6) に見られる語幹末子音の脱落,  
口蓋化を阻む (R11)  $i \rightarrow \phi / \_ 'u, 'a$  (語幹末子音が b, m, r の場合, 母音消去)

### ②母音の変化

(R3)  $i \rightarrow \phi / \_ j$  (i は j の前で消去する), (R4)  $i \rightarrow j / \_ u, a$  (母音 i に 'u, 'a が続くと母音 i が半母音 j になる), (R9)  $'i \rightarrow \phi / u \_$  ('i が u の後で消去して, 母音連続を避けている。)

### ③語の構成の違い (語境界の有無)

によって起こるものであるということが分かる。

## 23. 不規則変化#sir- (する), #kur- (来る) の形態変化

1 #sir+aa#→si[raa	#kur+aa#→hu[u (来よう)
2 #sir+aN→si[raN	#kur+aN#→hu[N (来ない)
3 #sir+u+na#→[siNna	#kur+u+na#→[kuN]na (来るな)
4 #sir+e+wa#→si[riwa	#kur+e+wa#→kuri[wa (来れば)
5 #sir+e#→si[rrii	#kur+e#→[huu (来い)
6 #sir+ibusja#→[siibusja	#kur+ibusja#→[ku+I] busja→[Cii] bu[sja (来たい)
7 #sir+ijabuN#→[sjaabuN	

<sup>10</sup> (R7) (R11) の語幹末の子音の指定がなんとも不恰好である。両唇音と弾き音の共通性が見当たらない。なんらかの未発見の規則性が潜んでいるはずである。

#kur+ijabuN#→[ku+]jabuN→[Ci]jabuN→Cjaa[buN (来ます) <子音の喉頭化>

- |                           |                              |
|---------------------------|------------------------------|
| 8 #sir+i+'uN#→[sjuN       | #kur+i+'uN#→Cju[N (来る)       |
| 9 #sir+i+mu#→[sjuumu      | #kur+i+mu#→Cjuu[mu (来る)      |
| ...                       |                              |
| 14 #sir+i+'u'ee#→[sjuue]e | #kur+i+'u'ee#→Cjuu[e]e (来るか) |





15 #sir+ti+'aN#→[sjaN	#kur+ti+'aN#→kicja[N (来た)
16 #sir+ti#mu#→[siimu	#kur+ti#mu#→ki[ci]mu (来ても)
17 #sir+ti#aN#→[sii]'aN	#kur+ti#aN#→ki[ci]'aN (来てある)
18 #sir+ti#uk+aa#→[sii]'ukaa~[sjuu]ka	#kur+ti#uk+aa#→ki[ci]'ukaa~ki[cju]ka (来ておこう)
19 #sir+ti#uN#→[sju]N	#kur+ti#uN#→ki[cju]N (来ている)

#sir- (する) は#tur- (取る) とほぼ同じように派生するが、15~19の派生過程で(取る)と同様の派生形が生じた後、tが消去して(?の過程)更に派生が進む点が異なる。

(R14) t→φ/V\_\_V (母音間でtが消去する。)

15~19のt消去 15 si-ti-aN→sitaN? siaN→sjaN 16 sir-ti-mu→si-ti-mu? siimu 17 sir-ti-'aN→si-ti-'aN? sii'aN 18 sir-ti-'uk-aa→si-ti-'uk-aa→situkaa? si'ukaa→sii'ukaa 19 sir-ti'uN→si-ti'uN→situN? si'uN→sjuN

#kur- (来る) も#tur- (取る) と同じように派生するものも多いが、1, 2, 5でhuu, huN, 15~19でku~ではなくki~となるなど不規則に派生する。

## 24. おわりに

語幹末子音の音変化を中心に形態音韻論の分析を行った。いまだ規則性が見つからない(不十分)ものもあり、これからの課題である。最後に、派生形を一覧にして表で示す。

### 参考文献

- 有元光彦 2007 九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究 ひつじ書房  
 内間直仁 1984 琉球方言文法の研究 笠間書院  
 上野善道 1977 沖永良部島諸方言の用言のアクセント資料 アジア・アフリカ文法研究 26  
 ——— 1999 沖永良部島諸方言の活用形のアクセント 琉球の方言 23  
 ——— 2000 沖永良部島諸方言の活用形のアクセント資料(2) 琉球の方言 24  
 サンフォードA シェイン・桑原輝男他訳 1980 生成音韻論 研究社  
 杉村孝夫 2003 八重山波照間方言の動詞の形態音韻論 新大國語 29  
 平山輝男編著 1986 奄美方言基礎語彙の研究 角川書店  
 宮良信詳 1995 南琉球八重山石垣方言の文法 くろしお出版

査読者の指摘により『福岡教育大学紀要 第一分冊 分科編』(58号、2009年2月、pp.47-62)に掲載された論文について、49ページ12行24字目、51ページ30行28字目、53ページ32行24字目をそれぞれ1字訂正した。